
パルの置き土産

橘川芙蓉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パルの置き土産

【Nコード】

N6973K

【作者名】

橘川芙蓉

【あらすじ】

砂漠の王国ベツヘルムで、雑貨屋を営む錬金術師のネリー。上級者貴族出身だが、家族と仲違いをし家出中。錬金術の腕前は、超一流。天才宮廷魔術師が、自分の部屋に魔法をかけて誰も入れない開かずの部屋にしてしまった。開けて欲しいと依頼がきたネリーは？：
：開かずの部屋と心の扉を開けると天才錬金術師の物語。
「錬金術師ネリー 星降る森の約束」の続編です。

パルの置き土産 1

親友が、自治区マロウの総督となり任地に赴いてから約半年ばかりがたった。王都ベツヘルムは相変わらず活気があり、毎日が忙しく過ぎていく。

私も、あの六貴族を巻き込んだ事件から3ヶ月ほどして、元の生活に戻った。

以前よりも増えたのは、エルフ王のゼラが頻発に私に会いに来ることと、今や王太子と面が割れているユリヤが仕事を持ち込んでくることだ。

特に、後者は面が割れてからは遠慮が無くなった。何でも屋だと思っっているのか、自分の手足のように扱う。

これで、支払いが悪ければ王子とはいえ、追いつ返している所だ。

私は、午後の客足が途絶えた時間にハمامへ向かうことにした。

ハمامは息抜きにはもってこいで、情報収集にもちょうど良い。

藤の蔦で編んだ籠に、木製の箱に入れたガスール、陶器製の広口の小さな壺に入れたカラメル、その他、ハمامで使うものを放り込んでいく。あつという間に、ハمامの一揃えを整えて、魔法で店に鍵をかけた。

ハمامは、公共の蒸し風呂で家に風呂を構えるほどのお金がない身分の者たちがよく利用する。料金も安い。

街には何件か公共のハمامがあるが、今日は王宮に近いハمامへと足を運んだ。

王宮へと通じる通りから、少し道を入ると、狭い道を埋め尽くすようにバザールが軒を連ねる。

ここでは揃わないものはないと言われるほどだ。気温が高くなる時間なので、朝に比べたら人は少ないが、それでも人がひしめき合っている。

バザールの喧騒を越えて、少し落ち着いた雰囲気の所にハمامはあ

る。

入り口でお金を払って中に入ると、むせかえるほどの熱気が私を出迎えた。

蒸し風呂に入るために服を脱いでいると、マルガリータがやってきた。

マルガリータは友人でうちの店のお得意様でもある。宮廷魔術師で、昼間からここに来れる身分ではない。本当は、暇な職業なのだろうか。

マルガリータは私に気が付くと、手を降ってこちらにやってきた。

「マルガリータ、暇なの？」

「ようやく解放されたの」

うんざり、といった口調だ。昨日から王宮に詰めていたとは、よほど忙しいらしい。

「悔しいけど、あの能天気魔術師は天才だわ」

マルガリータの言う、能天気魔術師は宮廷魔術師の中でも一二を争う実力者で、次席宮廷魔術師のパルサティラだ。

今は、マロウ自治区の王国軍魔術第一師団師団長をしている。いわゆる選り抜かれた人材だ。その上、彼には常に伝説が付きまとう。彼は生まれたときに起き上がり、簡単な予備動作で炎の魔法を撒き散らしたのだ、決して唱えてはいけない禁魔法を三つも取得しているのだとか、目から光の魔法を照射して敵を吹き払ったとか桁違いの噂が彼を彩る。決して「能天気魔術師」などと親しみやすく呼ばれる存在ではないのだが、柔らかい物腰と、いつも笑顔を絶やさない姿、坊っちゃん育ち故のお気楽ぶりに、本人を目の前にして同僚から「お気楽魔術師」だとか「能天気魔術師」などと好き放題に呼ばれているらしい。

どうやら、マロウへの赴任にあたり、彼は王宮の自分の執務室に何かを仕掛けていったらしく、宮廷魔術師総出で排除しようとしているのだが、さっぱりらしい。

パルの置き土産 2

一体、パルサティラは、何を仕掛けたと言うのか。

宮廷魔術師の地位を得られるのは、魔術師人口のおよそ二パーセント。選びに選び抜かれた優秀な人材の集まりなのだ。

それが、総出でただ一人の魔術師がかけた魔法に敵わないのだ。パルサティラの実力は押して知るべし。

「変に属性魔法をいじって念入りにかけているから、対抗属性魔法が持っていない奴は魔力供給人間になってるわ」

魔力供給人間というのは、マルガリータの造った言葉だ。

魔術師というのは、人それぞれ持っている魔力の量が異なっている。魔力は共有が可能なので、他人に供給することが可能なのだ。そのやり方が独特で、供給される側が供給してもらおう相手の頭を掴んで力を得る。当然、供給される側が、専用の呪文を唱えて分け与えてもらうのだが、はたから見れば搾取されているようにしか見えない。

「何が仕掛けられてたの？」

「執務室の入り口に謎の薄くて透明な障壁が一枚」

「それだけ？」

呆気にとられて、私が聞き返すとマルガリータは憤然とした表情になった。

だって、凶悪なモンスターでも仕掛けられたのかと思ったから。

「たかが障壁一枚と舐めてかかって、もう三日。魔力を持つ人は、障壁に弾かれて部屋に入れないのに、魔力を持たない人間には何の害もないのよ！冗談みたいな魔法よ」

服を脱ぎ終わって、板張りの蒸し風呂に移動しても、マルガリータの機嫌は直らない。長閑かな昼下がりで蒸し風呂の客は私みたいな自由業か、隠居した人ばかりだ。

蒸し風呂の熱気で更に、マルガリータの心は熱くなっていくらしい。「ただ弾き返すだけなら可愛げもあるのに、魔法攻撃してくるのよ。」

その人が苦手な属性で！半端な魔法をかけたら、吸収するか、反射しちゃうし……様子を見に来た騎士団のやつらと来たら、さんざ馬鹿にして執務室に抵抗なく入っていくのだから……！」

宮廷魔術師と王宮騎士の仲が悪いのは有名な話だ。わざわざ見に行くとは、恐れ入る。

王宮の広い廊下に鈴なりに宮廷魔術師たちが集まっている。彼らは、執務室の扉に向かって全力で魔法をかけているが反射される。それを困うように、騎士たちが集まって冷ややかな視線や嘲笑、場合によっては陽気な笑い声まであげて執務室に入っていく……そんな様子が目に浮かんだ。

「後任が能天気魔術師を好敵手だと勝手に思い込んでいる人だから余計に熱が入るのよね……面子にかけて障壁を壊すとか息巻いてた」「大変ね」

私は、ガスールを水で溶いて伸ばしやすくしたものを体に塗り始めた。同じように、マルガリータもガスールを塗りはじめた。

パルの置き土産 3

「で、ものは相談なんだけど……ラカシス様どこに行かれたか知らない？」

「あいにく実家とは連絡を取ってないから知らないよ」

「宮廷筆頭魔術師のラカシス様に頼るしかないのよ」

マルガリータは半泣き状態だ。あらゆる魔術書を読みあさって、障壁を取り除こうと努力したのだろう。

マルガリータは、古代魔術語を読めて発音できる貴重な人材だ。

古代魔術語は、特殊な発音をするらしく普通の人間は正しく発音できないのだが、マルガリータは正しく発音したあげくにその魔法を発動させることができる。

発音できるだけでも珍しいのに、魔法が発動してしまうのだから、実力はトップクラスだ。その人が音をあげるのだからパルサティラが尋常ではなく、さらにその上の筆頭魔術師が半端ないのを理解できる。スケールが違うのだ。

筆頭魔術師のラカシスは、ラカシス・プチグレンといって、私の母親だ。

母は桁外れの魔術師で生きながらにして伝説の人物に祭り上げられ、先の争乱の時には、誰も攻略したことがないという魔王の迷宮挑戦し、魔王を封印して生きて帰ってきたのだ。

救国の英雄なのだ。

生まれも、宮廷魔術師を代々排出する名門貴族プチグレン家の直系だ。魔力が溢れすぎているので、魔力封印のアイテムしか装備していないという人知を越えた存在だ。

「お母様のことは、お兄様方にきいたほうがいいと思う」

「あんたのこの兄妹たちは、ラカシス様に頼りたくないみたいよ」

「もしかして、パルサティラ様の後任はお兄様なの？」

「そうよ。あのイカれもやし意地になってるから」

一番上の兄であるリーンは母のあとをついで宮廷魔術師になった。母に似た容貌で繊細で整った美しい顔立ちで、背もすらりと高く、物腰は気品あるので、とかく女性には人気があった。

「王子みたい」とファンクラブもあると言うのに、「イカれもやし」と称するのは、さすがのマルガリータだ。二番目の兄も、姉も、妹も、弟も宮廷魔術師になった。私だけが宮廷魔術師ではない。

否……宮廷魔術師には成れなかったのだ。私には、魔術師になれるほどの魔力がなかったから。

「イカれもやしの爆走を止められるのはラカシス様しかないの。もう、そのうち宮廷魔術師使い物にならなくなるから」

「……こっそり、パルサティラ様に、解除方法を訊いたら？」

パルの置き土産 4

「そんなプライドのないことはできないわ!」

かけた本人に聞くのは泣きつくのも同意だ。プライドの高い兄たちや、マルガリータは絶対しないだろう。

「叔父様には相談した?」

母の弟は、私と同じ錬金術師だ。違いは、魔力はあるけど、錬金術師になったところか。錬金術師としての才能は随一で、ただ一人の宮廷錬金術師匠をしている。

この国は、まだ錬金術師の地位は高くないのだ。

「相談はしてないけど……」

マルガリータは口ごもったが、表情にでている。役にたつの?と訊きたそうだ。

「叔父様は、錬金術師だけど、魔術も確かだからきいたほうがいいと思う。ああ見えても、先の争乱で激戦区だった焰の砦の守備にいた一人だから」

私が生まれる前に終結した争いは、この国にかなりの被害をもたらしたらしい。

中でも、焰の砦と呼ばれた最後の王都防衛の要所で起きた戦いは、苛烈を極めたことで有名だ。

焰の砦では、兵士も市民もあらゆる人が防衛戦に参加した。

そのうちの自ら先陣にたち、人々を鼓舞しながら戦った人の一人だ。そのころ、母は仲間を連れ、生きては帰れないと言われた魔王の迷宮を攻略していたらしい。

焰砦の戦いは、それは見事な戦いで、不利な状況から一気に大勝利をもぎ取ったのだ。だからだろうか、周囲はラカシスの娘である私に魔術師としての才能を期待してきた。私だけではない、兄も姉も、妹も弟もみんなそれに応えた。

私だけが応えられずにいるところを叔父に救われた。

私は錬金術師になることだけが、さすがで学校に入る前から錬金術の勉強をしていた。

だから、叔父への信頼は群を抜く。

「そんなにすごい人には見えないけど」

相談してみるわ、とマルガリータは微笑みながら頷いた。

「それより、あんた。まだ帰ってないのね」

マルガリータは私の事情を知っていて、家族と和解することを薦めている。

これが、

単なる良心からくるお節介なら、反発しただろうけれど、マルガリータにも事情がある。マルガリータも私と同じように家族と折り合いがつかなかったらしい。帰るものと故郷から王都へ出てきて、地を這うような生活をしたらしい。ようやく、宮廷魔術師としての働き口を見つけた所で、ある知らせがマルガリータの元に届いた。家族全員が流行り病で亡くなったのだ。

マルガリータの家は、中程度の家柄の貴族で慎ましい生活を送るのには不便はなかったらしい。

しかし、マルガリータが家を出たあと、どんどん生活は困窮し薬すら買えないほど落ちぶれたらしい。困窮の原因は農作物から得る税収が減ったこと。

マルガリータは家にかえって、家具類が減ってやけに部屋が広くなったのを驚いたらしい。それでも自分の部屋は手付かずだった。売れば、薬を買えたというのに。自分の部屋が変わらないことを知って、言葉もなく立ち尽くしたらしい。

だから、彼女は私に手遅れになる前に和解しろと言うのだ。

だが、私は家に帰る気はない。家に帰るのは怖いのだ。

私は、小さい頃から兄妹たちの魔術の標的だった。体にはその時の傷が幾つも残っている。

一対一ではなく、兄妹総出で襲われ、生死の境をさ迷ったこともある。

両親は、私が魔術で抵抗しないことが不思議だったらしい。

止めにはいることはなく、叔父が私を引き取るまで、重大なことだと思わなかったようだ。

おまけに、魔術が使えないことで使用人からも主人であるとの認識をされていいい。

「私は子供の頃のことを忘れた訳じゃないわ……プチグレンの名前を名乗っているのは叔父様に感謝しているからで、家に戻りたいからではないの」

「……エルフ王と繋がりがあことは知ってるの？」

「母は知ってる」

「イカれもやしに注意しなさい。エルフ王と繋がりがあると知れたら、無理矢理和解しに来るから」

「お兄様は何を企んでいるの？」

マルガリータは、兄がしようとしている何かを勘づいたみたいだ。だから、最近の仕事をことを話題にだしたのだ。

「宮廷魔術師の地位を高めるというのだけなら、可愛げもあると思うけどね」

マルガリータは言葉を濁した。宮廷への影響力を増やそうとしているのだろうか。

プチグレン家は、魔術は提供するが政治には口を出さないことで、地位を守ってきたのだ。

「ラカシス様が抑制してくれると思うけど……ごめん、あまり深刻に考えないで」

マルガリータはそう言ったけど、私には一抹の不安が心の片隅に、滴のようにしたたり落ちた。

パルの置き土産 5

ハمامから出て、マルガリータと十字路で別れると、私はバザールを歩き始めた。

今日の夕食を買うためだ。厨は、金持ちではないと持てない設備なので、一般市民は材料を購入して、屋台で料理を作ってもらう。持ち帰りもできるし、屋台で食べることもできる。

今日は何を食べようかと考えながら、食べ物が並ぶ辺りを物色する。シシカバブでも食べたいなと思って、ラム肉の並ぶ店に向かう。歩きながら、店の主人たちが客を呼び込もうと、大きな声で商品の良いところを並べ立てる。

果物や菓子が並ぶ店では、小さく切られたものを試食させようと渡してくる。

手渡されたオレンジが余りに甘くて美味しいから、二つ買った。それを、ハمام道具が入っているかごの上においた。

太陽の色をした少しだけ歪な形のオレンジが爽やかないい香りを漂わせている。

その後、ラム肉とパン、ヨーグルト、トマト、セロリを買い求めた。もう少し、商売してから夕食にしようと家に帰った。

およそ貴族らしくない両親ではあったが、屋台で食事をするのは見たことがなかった。勿論、そんなことをしなくてもいい身分だったからだ、なんでも常識はずれの人が常識的なことをするとなんかおかしい。

父は、家格こそプチグレン家より良い貴族の出身だったが、長子ではなかった。家を継がないので、今の生活を維持するなら宮廷に勤めて地位を確保するか、婿養子に行くしかなかった。

父は、上官であった母と恋に落ちたらしいが、想像がつかない。

とにかく、家格はしたの家に婿養子に行ったものの、兄弟の中では一番宮廷内で出世している。

ラカシスの夫だからと、七光りでの出世ではない。ともすると、常識では考えられないことをやりだす母を止められる唯一の人物だからだ。

私は、昼間のマルガリータの話を思い出した。兄がどんなに爆走しようとするには、枠外の母と常識人の父が待ち構えているのだ。みすみす、ヘマをさせるわけではないと思う。

日も落ちたので、ランプに火をいれて店の片付けをする。

オススメ品を書いた小さな黒板を店先で片付けていると、招かざる客がきた。

「……見て分かるでしょ。閉店よ」

冷たく言い返しても、相手にはそよ風が吹いたぐらいにしか効き目がない。

王都警備隊の制服をきたユリヤとイスファーンだ。

ユリヤは現在の国王の正式な後継ぎで、まかり間違っても王都の下町で、警備隊の服装でいてはいけない人だ。

「ちょうど良いね。君に話があったんだ」

「これから夕食を食べに行くの」

厄介ことはごめんだから、追いつ返そうとするのにニコニコとユリヤは笑ったままだ。

「食材は僕達も持つてるよ。屋台に行こうか」

イスファーンが、腕に抱えている籠を私に見せた。そこに食材が入っているらしい。用意の良いことだ。

私はため息をつきながら、ハマムの帰りに買った食材と持ち帰り用のふたつきの容器を籠に入れた。

いつもの屋台に行つて、調理をしてもらう。

ラム肉は私のリクエスト通り、シシカバブでトマトとセロリはになった。ヨーグルトとトマトでスープも作ってもらつて器にいれて貰った。

ユリヤたちも似たようなメニューになっていた。

シシカバブは、芳ばしい匂いがして食欲を誘う。トマトとヨーグル

トのスープは、夕日の色をしている。

私達は足早に家に帰った。

居間でさっき調理してもらったものを皿に盛った。食事をしながら、ユリヤの話を聴くことにした。

「君も耳にしているだろう。 宮廷魔術師の執務室の騒動だ」

パルの置き土産 6

「いきさつだけはね」

私はスープを飲みながら答えた。

「手伝ってほしいんだけど」

「お断りします」

にべもなく即答した。こういう奴には隙を与えてはいけない。

「宮廷錬金術師からの正式な依頼でも？」

「叔父様から？」

まさか、マルガリータときたら昼間別れたら、即、叔父様に相談した結果がコレとかいうのかしら。

「執務室の障壁を取り除くには、錬金術師と魔術師が必要らしい」

「叔父様がやれば良いじゃないの」

「一人では心もとないらしいよ」

私はシシカバブにかじりつきながら、そんなわけあるか、と内心で毒づいた。

「手紙を預かっている」

イスファーンが丸められた羊皮紙を私に渡した。封は蠟でされていて、叔父様の紋章が型どられている。

親書だ。

私は礼を言つて、手紙の封を開いた。

叔父様の見本のような流麗な筆跡が目に入った。

書かれていたのは、主に二つ。

一つは、叔父様は宮廷錬金術師の後継ぎを私に、と考えていること。宮廷での発言力をます機会らしい。

もうひとつは、兄のリーンに関すること。兄は、出世欲が強く至高の地位を望んでいること。現在の国王に対して篡奪を企んでいるらしいが、憶測の域をでない。いざというときに、ストッパーを増やして起きたいらしい。まだ、気が付いているのは、プチグレン家の

一部であること。

反逆罪となれば、一族みな死罪だ。

兄は何を考えているのだろう。

この国にそんなに不満があるのだろうか。私の脳裏に、「この国の礎になる」と儚く笑った友人の姿がよぎる。

彼女は命をかけて、この国と国に住む人のことを考えて国王を支えているのに。

最近の外征だってないのに。

国は豊かであるのに。

「分かりました。引き受けます」

「……良いのか？」

ほっとしたような表情をしながらも、ユリヤは尋ねた。

「何が？」

「お前が障壁を消したら、兄のリーンとは同じ道は歩めないだろう。敵対勢力になるのだから」

「兄と叔父様はそこまで仲が悪いの？」

「今は、首席魔術師はラカシスだから関係は良好だ。しかし、世代交代をしたらどうなるかな？」

「ユリヤは何でも見通す鏡を持っているみたいね」

私が宮廷錬金術師の後継候補であること、リーンが至高の地位を望んでいることを察しているのだ。

「構わないわ。兄は、私のことを人間と思ってないから」

今更だ。今更、好かれようとしても無駄な努力だ。

私は、宮廷で障壁を消すことを了承した。

次の日、朝からゼラがやって来た。私は、ゼラから連絡用の精霊魔法が籠められているアイテムを貰っていた。それを使って連絡をしたら是非、宮廷に行きたいと言いだしたのだ。

エルフ王がいきなり宮廷に行ったら外交問題になると思ったのだが、ゼラは全く気にしていない。

それでも、人間の青年に見えるように、とがった耳を長い髪の毛で隠している。

ゼラと二人で宮廷に登城すると入り口で叔父様が待ち構えていた。挨拶をして、互いの近況を伝えあう。

叔父様は、数いる兄弟のなかで唯一、母と同腹の姉弟だ。顔立ちも良く似ている。とてもかっこいい、素敵な人だ。

問題の宮廷錬金術師の執務室につくと、部屋の前は黒山の人だかりだった。

魔術師たちと、野次馬の騎士たちの集団だ。

私達がきたのが分かると、真ん中からさつと別れて道ができた。魔術師たちからの視線が痛い。

そこまで、錬金術師が嫌いか。

私は、まず障壁に触れられるかそつと手を伸ばす。何も触れずに、手がすり抜ける。私程度の魔力に反応しないようになっていた。みた。

次に叔父様が、手を伸ばす。何もないところで空中から火花が飛び散る。

叔父様ぐらいだと反応するわけか。

発動させるために、何かアイテムが仕掛けられているはずだ。

いくら無尽蔵に魔力があると言われていたパルサティラでもアイテムを使って楽をしているはずだ。

火花が飛び散る直前に扉と同じ大きさで複雑な紋章が浮かび上がっていた。

あの魔方陣みたいなものがなんだか分かれば、解除できるかも。

「あれは、侵入者を阻む魔方陣で、魔法石で刻むなら二個は必要かな」

叔父様が教えてくれた。魔法石は、錬金術師がつくる魔法が籠められた石のことで、一般できなお役だち魔法石は、安価で売られているがここまで複雑なのは完全生産性だ。

……こんなのを作れるのは、叔父様ぐらいしか私は知らない。

「叔父様、あそこに魔法石が見えますが、叔父様が作られたのかしら？」

執務室の中にある机の上に、青く光る拳骨サイズの石が鎮座していた。

石には複雑な模様が刻まれているのが見てとれる。

「あれは、そのひとつだね」

複数あるというのか！

私は部屋の中に入って、辺りを見回す。本棚の上にもうひとつあった。

本当に、二つだけだろうか……

刻まれた模様を見る限り、もうひとつないといけない書き方になっている。

「僕が探すよ」

ゼラは短く呪文を唱えると、星屑が煌めいて消えた。精霊魔法はいつ見ても美しい。

パルの置き土産 7

やがてゼラは、木の下にあると言った。

場所は執務室前から見える大木らしい。根元に埋まっているようだ。精霊に探索を頼んだのだから、三つしかないのだろう。

問題は解除する方法だ。魔法では無理、となると物理的に魔法石を破壊するしかない。

錬金術師が魔法石を作るときに、石の強度も、破壊の仕方も決めるのだが、叔父様はどうしたのだろうか。

叔父様は教えてくれそうにないので、机の上ののっている魔法石を掴んで刻み模様を読み始めた。

「……石を壊すには、反作用を刻み込む」

刻み込むには、反作用を使える技術者に限る。

石を一ヶ所に纏めないのは、なんでかしら？

まさか、苦手な属性を導き出すために、精霊魔法の使いやすい外に石を置いた、とかかしら？

精霊魔法は属性のバリエーションは豊富だ

エルフの契約者がいないと精霊魔法を籠めてもらえないと思うが、パルサティラは契約者だったはずだ。

精霊魔法がかかっているのは、木の下にある魔法石だから、ゼラに任せよう。

執務室にあるうちの、ひとつは魔法がかかっていて、もうひとつは錬金術で作り出した作用だ。

「叔父様、もう一度手を伸ばしてくださいませんか？」

魔力で反応するなら、魔法がかかっているほうが光るはずだ。

パルの置き土産 8

叔父様が再び扉の辺りに手を伸ばすと、火花が飛び散り本棚の上に置いてある魔法石が青白く輝いた。

外側から狙いにくい位置に置いてあるのだ。

魔法石を壊すには、反作用を石に刻む。石に刻む動作はすべて錬金術の剣舞に含まれている。

儀式で舞う剣舞は、ただ儀式を盛り上げるためだけの優美な舞ではない。石に刻めば、実際に魔法石として使うことができるのだ。

私は、剣舞が苦手だ。運動神経を要求してくるからだ。

「……遠隔操作できたりする？」

私は、ゼラに聞いた。

「遠くからネリーの動きを手にとるように見ることはできるよ」

「あの木の下で私と同じように剣舞はできる？」

「寸分の狂いなくできるよ」

「わかった。これを持っていつて。私の動きを見ながら、剣舞をするの。私の動きが見えたら、合図をして」

ゼラに魔法石のついた予備の小太刀だ。私用にカスタマイズされているが、私とゼラの親和性なら問題ないだろう。

「一曲終わったら、叔父様、同調しながら一曲舞いましょう」

叔父様と一緒に本棚の魔法石を無効化する。最後に私が机の上ののっている魔法石を破壊すれば、終わりだ。

「じゃ、始めるよ」

ゼラは回廊の窓を開けて、音もなく飛び降りた。飛び降りるときに長い髪が舞い上がって、長い耳がちらりと覗いた。

野次馬たちが「エルフだ」と口々に呟く。やがてゼラから合図がきた。

私は、神話を歌に口ずさみながら、精霊魔法の籠められた魔法石を破壊する舞を踊る。

足を鳴らし、手を叩いて手首に巻き付けられた装飾の鈴が鳴る。古語でつむぐ神話は魔法の呪文みたいだ。本当は口に出すのは何でも良いみたいだけれど、古語の神話の方が変に気が散らない。

小太刀の柄に巻き付けた七色の細長い布が幾重にも宙に弧を描いて舞い上がる。

一曲終わると、ゼラのいる中庭の辺りからガラスの割れるような、それより少し軽いものが割れる音がした。

ひとつ、破壊できた。

叔父様と目で合図をしあって二曲目を舞う。二曲目は叔父様の選曲だ。

確かに、何の言葉を口に出しても舞いさえあっていればいいのだから構わないのだけど。……だけど。

なんで、神話の神の求婚シーンなのかな。男女の応答があるから同調はしやすいが。

先ほどとは違う弧を描いて踊る。叔父様と鏡あわせの用に舞を踊る。二人で扉のあたりで手を合わせると、ガラスの割れるような音がした。

二つ目の魔法石が破壊されたのだ。野次馬たちから歓声があがる。

最後、机の上にある魔法石だ。

私は神話を口に乗せる。私の好きな、秋の実りの神話だ。手をならして鈴をならして紋を刻んでいく。

やがて、魔法石が割れる音がする。私は、力が抜けて、そのまま倒れそうになると、力強い腕がせれを支えた。

とっさにゼラかと思ったが、馴染みのないゼラよりも細い腕だ。

私が眠いのを堪えて、瞼を開くと会ってから久しい、一番上の兄であるリーンが私を抱き抱えていた。

マルガリータが「イカれもやし」とあだ名をつけたとおり、ひよろ高い身長に、羨ましいぐらいに綺麗な金髪、美しい顔立ちに、宝石のような紫玉の瞳。漆黒の魔術師のローブがよくにあってる。

「よくやったな。褒めてやるぞ」

相手を魅力する優しい声で出てきた言葉は高慢なセリフだ。

お前が意地になって魔術を解除しようとしたからこんな騒ぎになったというのに……。

私が反論するより早く口を塞がれる。口どころか鼻までも一緒に塞ぐものだから、息が苦しい。

こいつ私を窒息させる気かつ。

私が暴れだすと、困ったような笑みを浮かべてようやく塞いでいた手をはなした。

「礼をしなければね。皆は持ち場に戻れ。叔父上は後程」

いうや否や、短い動作でリーンは移動の魔法を唱える。

あっという間に、光の輪に包まれた私とリーンは王宮の執務室から跳躍した。

光の輪から抜けてみたら、知らない部屋のベッドの上で、リーンが私を覗きこむように見ていた。天井がやけに豪奢なのでリーンの邸宅なのだろう。

「気が付いたか。我が妹」

「何かご用かしら？ リーン」

いつからだろう。私は、年上の兄弟たちのことを名前で呼ぶようになった。それまでは、貴族の娘が皆やるように「リーンお兄様」などと呼んでいたものだ。

「いい加減、帰ってきたらどうだ？じゃじゃ馬」

「家に帰る必要がありません」

「ああ見えて、父上や母上も心配している」

確かに、心配はしているだろう。たまに、母が「仕事のついで」だと言つて様子を見に来る。

「居られないようにしたのは誰ですか」

リーンとは、五つほど年齢が違う。思春期に入ると、体格差を利用して床に押さえつけられたこともある。

「……それは……仕方ないだろう……お前だけが、父上と母上の実の子供なのだから」

私は言葉にならなかった。血の繋がりがあと思った兄弟たちは、そうではない？

「お前は知らないのか……ラカシス様たちは、戦争で孤独になった子供を引き取ったんだよ。実子のように、高学歴を惜しみ無く与えてくれた」

「でも、顔立ちはよく似て……」

「顔立ちは環境で似てくるさ。俺の髪色は本当はこんな色だ」

軽く右手をふると、金糸のような髪が闇色に変わった。

「まさか」

「だから、実子であるネリーは散々虐められたんだ。みんなから羨ましがられて」

「虐めて良い理由にはならないわよ」

「分かっているさ。謝罪はする。……とりあえず、少し休め。ここは、俺の家だ」

リーンは、私をベッドに寝かせると、小さい子供にするように私の額にキスをした。

小さい頃にはしていないスキンシップに私は、リーンを睨み付けた。「おやすみ。ネリー」

睨んでいるのをもちとせず、リーンは微笑して部屋から出ていった。

あんな笑顔は初めてみたので、背筋に寒気が走った。

天変地異の前触れだつりするのか？

休めと言われたものの、そこまで疲れている訳ではない。あの気色悪いリーンに捕まっていると、より悪いことが近寄つて来そうだ。幸い、服装は変えられてないので、ベッドから起き上がってブーツを履いた。部屋には鍵がかかっていなかったなので、扉をあけて廊下に出た。

貴族の邸宅と言うには十分な広さがありそうだ。向かい側に部屋がみつ。かなりの間隔をあけて扉があった。私のいる方も同じような作りだろう。出口を目指したくても、どうしたら良いのか。

私は、誰かに会わないかと適当に道順を覚えながら歩き始めた。

少しだけ、豪華な作りの扉にたどり着く。応接室だろう。前を通ると、話し声が聞こえた。さすがに立ち聞きの趣味はないので、立ち去ろうとした。聞こえてきたのが叔父様の声だと気が付いたので、思わず立ち止まった。

「ネリーが本当にそうだったのかね？」

「ネリーも理解するはずです。誰のそばにいるのが、一番良いのか」

「君の側だと、言った？」

「俺以外の誰かふさわしい相手でも？」

何、勝手なことをリーンは言っているのだろう。

本当にイカれもやしの異名は伊達じゃないな。

「プチグレン家の跡取りが、エルフと結婚はありえないでしょう」

私は気が付いたら、応接室の扉をあけ放っていた。

「ゼラのことを悪く言わないで！今まで、ほったらかしにしていた

貴方に言われたくないわ」

二人は啞然と私を見ている。
笑い始めた。

いち早く戻った叔父様は肩を震わせて

リーンは、私の登場に驚いていた。あのまま大人しく私が眠ったと思っただろうだ。

そうは、問屋が下ろさないよ！

私は、部屋に入ってリーンの前で仁王立ちをした。

「私はエルフと契約できたことに、誇りを持っている。たまたま、エルフ王だったけれど、ゼラは私のかけがえの無い仲間なんだ。侮辱するようなことは、許さない」

一気に幕したとすると、リーンはぽかんと間抜けに口を開けて私をみていた。

やがて、正氣に戻ったのか、顔を真っ赤にして怒鳴りつけた。

「な．．．．．なんて言葉使いなんだ。小さい頃は、見本のような話し方で、まるで人形のようだと言われていたじゃ無いか」

「そんなのまだ、十歳にもなる前の評価じゃないか」

誰だって幼い頃は、天使と見まごうほどの可愛らしさなのだ。世界を知るうちに、醜さが出てくる。それが大人になるというなら、なんとこの皮肉だろう。

「お兄様、と呼んでいたいたじゃないか」

「黙れ、シスコン」

私達のやりとりに、叔父様は肩を震わせて笑っている。リーンは、私の返事に処理能力の限界を超えたようで、口を開けたまま固まった。

実家にいた頃は、気が付かなかったが兄弟たちは彼らなりに、愛情表現をしようとしていたのだ。

それは、恐ろしく歪んだ方向に向かったようだが。

「考え直せ、ネリー。俺の元にいれば、楽に暮らせる」

「いまの生活も楽しいの。それに、ゼラの嫁になったら私は王妃だ」
ゼラの嫁というのがきいたのだろう。リーンは再び沈黙した。

「馬鹿なことは、考えないで宮廷魔術師で満足することね」

私は言いたいことをいって、部屋をあとにしようと背を向けた。そこへ、笑いを収めた叔父様が声をかける。

「送っていこう。ここは、迷宮になっているからな」

リーンの性格は、屋敷の間取りにまで現れているようだ。

「私は、ネリーの好きなようにすればいいと思うよ」

「それは、プチグレン家当主としての言葉ですか？」

叔父様は、目を細めて優しく微笑みながら言った。

「個人的な意見だけど、当主の見解をあわせたいと思うよ」

いつか、叔父様は、なぜ私を後継ぎに選んだのか話してくれた事があった。現実をよく見ているから、といていたが、もしかしたら、私ただ一人がプチグレン家の血をついでいるからかもしれない。

そう思うと、私は素直に喜べないでいた。

パルの置き土産 最終話

叔父様に連れられて、リーンの屋敷から出ると、屋敷の前の道で、ゼラがうろつろつと歩き回りながら待ち構えていた。

門番だっているのに、よく王都警備隊に通報されなかったと思う。

ゼラは、私の姿を視界におさめると一目散に駆け出してきた。満面の笑顔で私達を出迎えた。

ゼラの様子に叔父様は苦笑して、宮廷に戻るからと、リーンの屋敷の前で別れた。

「遠慮なんかしないで、リーンの家に入ってくれば良かったのに」

「入りたくても、あいつの魔法が僕の行く手を阻む」

物は試しだと、ゼラは一步リーンの屋敷に足を踏み入れると、見えない壁が火花を散らして、ゼラを弾き返した。

「破ることは、できないわけじゃないけど、この家壊しちゃうと思うんだ」

だから、もどかしく思いながら外で待っていたのだという。

私は自然と、笑顔になってゼラに御礼を言った。

「久しぶりに僕の家においでよ」

ゼラの誘いは、魅力的だった。妖精の森は幻想的で、癒されるのはびつたりだった。食べ物も美味しいし、ゼラや他の妖精達との話も楽しい。

私達は、連れ立って王都の城門をでた先にある、暁の森へと向かった。

妖精の住処である暁の森は、契約者ではないと入ることは出来ない。幾重にも魔法がかけられているので、迷ったあげくに、砂漠に放り出されているというのも珍しくない。

夕陽に合わせて、オレンジ色に光る灯火が、道に沿って無数に置かれている。

いつ来ても、森の中とはおもえない美しさだ。

やがて、下草が途切れると今度は木製の長い螺旋階段が待ち受けていた。

ちょうど、夕食の準備中らしくあちらこちらから、いい匂いがする。風に乗って、歌うようなざわめきも聞こえた。

契約者ではない人間が入ってこれる森の境い目で、初めてゼラに会ってからもう、十二年になる。

そのときから、ここに出入りをしていたから、暁の森は私の第二の故郷だ。

長い螺旋階段を登っているのに、全く疲れない。高い木の枝に掛けられている球体の灯火が、銀色にぼんやりと光っていて、ゼラの美しい髪をきらきらと輝かせた。

こうして、ゼラと並んで歩くことが、幸せだと思う。時折、ゼラと言葉を交わして、無言になる事もあって、でもそれが居心地がいい。長い螺旋階段を登りきって、ゼラの家についた。家というか、宮殿ね。

門番には、ゼラの乳兄弟とかいうエルフが立っていて、主のかえりを待っていた。

「ジルが、陛下に火急の用件があると、部屋でお待ちです」

「わかった。すぐいく」

ゼラは、王様の顔で答えると、私に向き直った。

「用事を終わらせて、すぐに向かうから、好きな部屋でくつろいで」

私は頷くと、ゼラチンは満足そうに微笑んで、執務室へ向かった。

何度も遊びに来ているので、迷う事はない。中庭の珍しい薬草の畑があるので、それを見に行くことにした。

薬草をみはじめてすぐ、門番の彼が私を呼びに来た。

「陛下が呼びだ」

私を執務室に呼び出すのは珍しい。親しい仲とはいえ、エルフの王様の執務を覗き見る趣味はない。私は執務室へと足を運んだ。

執務室には、ゼラのほかにゼラを支えるエルフの一人であるジルがいた。

執務室というと、人の場合は豪華なものを想像するが、エルフの執務室は質素だ。

「ネリー、この手紙を読んでご覧」

ゼラがてにしていた、羊皮紙に書かれたごく普通の手紙を受け取った。どうやら、ジルの契約者である宮廷魔術師第一師団第一部隊部隊長であるパルサティラからの手紙のようだ。

リーンが、倒したくて仕方がない宮廷魔術師の二番目の実力者だ。手紙の内容に私は息を呑んだ。

隣国であるエストール王国が、同じく隣接するレミグランド帝国に侵略されたのだ。国王は捕らえられ、国は混乱の最中だという。しかも、レミグランド帝国軍は、そのまま隊列をなし、ベツヘルム王国へと進軍しているという。

交易の重要都市である、自治区マロウにいるパルサティラだからこそ入手できた情報だ。

今頃は、国王にも同様の情報がマロウ総督の名前で報告されているはずだと、手紙には書かれていた。

戦火に巻き込まれないように注意しろという気遣いで、手紙は締めくくられていた。

「まさか……」

私はそれしか呟けなかった。二十年前の戦いで平和協定を結んだはずだというのに。

「僕の考えだとね、王都の守りの次に強固な軍はマロウにいる軍だよ。間違いない、マロウ総督の名前で、軍を出すことになるんじゃないかな」

ゼラの言葉に私は返事が出来なかった。マロウには、私の親友のルシードがいる。

戦いの予感と、リーンの漠然とした不安に私は心が揺れていた。

それから間もなく、レミグランド帝国が、ベッヘルム王国の西の国境を越え、侵攻してきたことを知った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6973k/>

パルの置き土産

2011年3月30日20時20分発行